

愚鈍な少年、格好いい中年

ゆっくり霊沙

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

他の作品が行き詰まったので気分転換に・・・
あと作者の練習も兼ねています。

目次

プロローグ

???

「なあ、うちと結婚して子供もできて、うちら幸せやろ？なんでそんなん行き急ぐ？友達のためか？」

「・・・ああ、友人であり、私の上司でもある。」

「だったら、な！なんでーそんな危ないことするんや？ええやんか任せれば。」

「一応給料も貰ってる身だから・・・。」

私はRと書かれたネクタイを身に付ける。

「・・・帰ってきて・・・。」

「約束する。」

「ん・・・」

~~~~~

「なあラツキー、おではダメな子なのか？」

「ラツキー？」

少年の父親は山男とよばる普段は炭鉱夫として働いており、その息子のデナリはぽっちゃりした体つきで、父親の仕事内容と体型、そしてトロい正確でニビシティの他の子供の達から虐めとはいかないがハブられていた。

元々住んでいる場所がニビシティから少し外れたるばん道路であり、ニビシティに行くよりおつきみやまの方が遊べるため、タマゴが

ら育てたラツキーと共に毎日のようにおつきみやまに行っている。

「ラツキー、どくどく。」

「ラツキー！」

おでもラツキーも足が遅いからイシツブテの集団にどくどくを撃ち込んで、タマゴうみで回復しながらイシツブテが倒れるのを待つで、イシツブテがごく稀に落とすからわずの石を貯めてフレンドリーシヨップで売っておこづかいにじでる。

んで、ズバットは毒で倒せないからにげるだ。

いづか倒してみたいと思つでる。

「ダメな子ダメな子つで周りは言うけど、おやじもお袋もそんなごと無いって・・・どっちだろう。」

「ラツキー?」

「・・・ジムで勝てば見方も変わるだろうか?」

「ラツキー?」

「お前は凶太いなー。」

「ラツキー#」

「あいたた、殴るな殴るな。でもお前は本当に攻撃が弱いな。なんでだ?」

「ラ、ラツキー・・・。」

「急に落ち込むなよ。・・・ほら、イシツブテだ。どくどくを頼む。」  
「ラツキー!」

山小屋みたいな家で家族3人で暮らしている。

母親はスラツとした優しそうな女性で、胸が無くて絶壁扱いされていたらしい。

「お袋、がえつだー。」

「おかえりなさい。手を洗ってきてー。ラツキーもね。おやつは出来

てるから早く食べちやいなさい。」

「はい。ラッキー行こう。」

「ラッキー♪」

「なあラッキー、おで、お前以外に仲間にするならどんなポケモンがいいか？」

「？」

「足が早いのが良いかな？」

「ラッキー（欠伸）」

「真面目にぎげよ!!」

ゴシゴシ（目を擦る）

「んー、んー。」

おではポケモンスクールにも行ってないから独学でしか学べない。  
ニビシテイのジムリーダーのムノーお兄さんはおでに色々教えてくれる。

でもムノーお兄さんとバトルするにはジムに集まったトレーナー  
と5連勝しなきゃいけない。

「んー。」

「・・・デナリ、一回チャンピオンのオーキド・ユキナリさんのバトル  
がトキワでやるらしいから見に行つて来なさい。あそこまでの道な  
らラッキーだけでも大丈夫だから。」